

明治・九谷焼の名窯・作家

～ 日本の伝統的美意識や技法を引き継いだやきもの ～

綿野吉二商店

綿野家はもともと木綿商でしたが、父・源右衛門は九谷焼の輸出を志し、1873年のウィーン万博に出品、1879年のフィラデルフィア万博にも出品しました。

綿野吉二（1859 - 1934年）は1877年、父の跡を継ぎ、1879年にはパリに九谷焼の直輸出を試み販路拡張に努めました。また、京浜地区の同業仲間とともに日本貿易協会を設立し、1882年には陶商同盟の頭取となりました。粗製乱造の商品が現れはじめた1882年、綿野吉二らの努力で、陶磁器技術の革新の第一人者「納富介次郎」が説いた“生産地のあり方”についての意見を取り入れ、能美郡の九谷業界を同盟規約でまとめ、その後に相ついで発足した、九谷陶器商同盟会、窯元同盟会、陶画工同盟会などが一体となって、業界の問題に対処する体制を作ったことでした。こうして、輸出見本の製作、上絵の徒弟試験の導入、共同窯での統一製品の製作などが

実施されたことから、画風が刷新され、輸出が一段と伸びました。

さらに、綿野吉二は1887年、欧米から求められた品質の高い製品を作るために、自邸に錦窯数基を築き、それを「天籟堂」（てんらいどう）と称しました。そこには小松から石山 文吉、佐々木 梅松、山上 佐吉などが招かれ貿易九谷の絵付をしました。さらに、明治22年には金沢から津田 九憐、柏 華溪、村田 甚太郎、窪田 南山、平松 時太郎、田辺 溪泉などが寺井に招かれ、九谷焼の優品が作られました。その主なものは、高さ1.5mの花瓶、直径90cmに及ぶ大香炉、壺などで、貿易品として盛んに輸出されました。

1889年のパリ万博【銀賞】、1900年のパリ万博【銀牌】の受賞歴があります。